



日本植物病理学会ニュース 第109号

(2025年2月)

【学会活動状況】

1. 部会開催報告

(1) 北海道部会開催報告

令和6年度日本植物病理学会北海道部会では、北海道大学農学部（札幌市）を会場として10月12日（土）に第230回談話会、13日（日）に一般講演が開催された。参加者は40名であった。談話会では「北海道で問題となる病害をめぐる話題」をテーマとして農研機構の川口章氏から「積雪地帯におけるブドウ根頭がんしゅ病の生態解明」、岡山大学の能年義輝氏から「ブドウ根頭がんしゅ病のバイオコントロール細菌 *Allorhizobium vitis* VAR03-1 の拮抗作用 ファージ尾部様バクテリオシンと根圏定着特性」、道総研中央農試の小松勉氏から「ブドウつる割細菌病に関する研究」、同じく道総研中央農試の新村昭憲氏から「北海道における小麦なまぐさ黒穂病の発生と対策」についてご講演をいただき、質疑応答のほかにも総合討論として全体を通じた視点からの活発な討論が行われた。一般講演では菌類病3題・細菌病1題・ウイルス病8題の計12題の講演があり、座長による質疑応答はスムーズに行われた。懇親会でも大いに部会員相互およびご招待した演者の方々との親睦が深められ活発な情報交換が行われた。次年度は10月に札幌市内の施設を会場として開催される予定である。（秋野聖之）

(2) 九州部会開催報告

令和6年度日本植物病理学会九州部会は、令和6年11月14日、15日に、佐賀県立男女共同参画センターアバンセ（佐賀市）にて、正会員28名、学生正会員5名、非会員11名（合計44名）の参加により開催された。講演発表は、糸状菌病8題、細菌病4題、ウイルス病1題、その他2題の合計15題とやや少なかったが、九州地域で深刻な問題となっているサツマイモ基腐病やタマネギべと病の防除対策、病原菌の生理生態について報告され、活発な議論と意見交換がなされた。本年度の部会表彰の受賞者は以下



写真 講演の様子

のとおりであり、受賞者講演が行われた。また、幹事会、総会において、令和7年度役員、予算案、次回部会開催地（沖縄県）等が承認された。

○日本植物病理学会九州部会地域貢献賞 鹿児島県病害虫防除所所長 西八束氏

「九州沖縄地域のイモ類病害の発生生態解明および防除技術」

○同地域奨励賞 沖縄県農業研究センター病虫管理技術開発班主任研究員 安次富厚氏 「沖縄産栽培作物に発生する植物病害の特定と化学的・生態的防除に関する研究」

○同学生優秀発表賞 九州大学大学院 若山和佳氏 「*hrpB* 遺伝子破壊株による青枯病の生物的防除におけるトマト幼苗での野生株の挙動」

（稲田 稔）

2. 研究会・談話会等開催報告

(1) 第31回土壌伝染病談話会

第31回土壌伝染病談話会は、10月17日～18日、文部科学省研究交流センター（つくば市）にて、正会員88名、学生正会員5名、非会員20名（合計113名）の参加によ

り「改めて、土壤伝染病の発生要因を知る」と題し、農研機構が事務局として開催された。有江力氏による基調講演「土壤伝染性フザリウム病のパンデミックー病原性や宿主特異性の分化・進化、感染拡大はどう起こるのか？」に始まり、「静岡県におけるネギ類黒腐菌核病の発生要因を探る」(伊代住浩幸氏)、「群馬県におけるハクサイ黄化病の発生要因の解明および防除技術開発」(星野啓佑氏)、「モモ胴枯細菌病(急性枯死症)の発生要因の解明と対策技術開発の試み」(桐野菜美子氏)、「白紋羽病の発生要因と土壤微生物の相互作用」(郭永氏)、「サツマイモ基腐病を防除して健全苗生産に貢献する苗床土壤還元消毒技術の開発」(野見山孝司氏)、「ダイズ黒根腐病の発生に関与する栽培および気象要因の解析」(越智直氏)、「積雪地帯におけるブドウ根頭がんしゅ病の発生拡大の原因に迫る」(川口章氏)、「土壤病害の発生抑制をもたらす土壤微生物叢改変」(西岡友樹氏:産総研)、「土壤微生物叢の構造と作物病害リスク」(東樹宏和氏:京都大学)の計10題の講演が行われた。本談話会では、基礎から生産現場の課題解決まで議論するため公設試験場やメーカーなど生産現場に近い多くの参加者がみられた。17日夜の情報交換会においても多数の参加により議論が続き、コロナ後の開催を実感した。次回は、令和8年度に名城大学の荒川征夫氏を実行委員長として開催予定である。(兼松聡子)

(2) 第30回細菌病談話会

第30回細菌病談話会が2024年11月20日、21日に、茨城県つくば市の文部科学省研究交流センター国際会議場において、講演者を含め100名の参加者を集め行われました。細菌病談話会はこれまで2年に一度、2日間の日程で行われてきましたが、コロナウイルス感染症の影響で、2020年は不開催、2022年は法政大学での1日開催となっていたため、漸く元の開催形式に戻すことができました。また、先回に引き続き今回も学会からのご支援のみで開催費を賄うことができたため、参加費は無料とさせていただきました。日本植物病理学会のご支援に感謝いたします。

今回の談話会ではテーマを「現場目線の細菌病研究」とし、私共が日頃気になっている、植物病原細菌の分類のこと、環境中や植物体内での植物病原細菌の生態や微生物叢との関係、最新の細菌病害防除への取り組みについて、8題の講演をいただきました。最初に基調講演として澤田宏之氏(農研機構遺伝資源センター)から、「植物病原細菌の分類と新種の記載」と題し、細菌分類手法の歴史的変遷、近年の新種記載のルール、これまで*Pseudomonas*属とされてきた細菌の再分類に係る問題などをお話しいただきまし

た。特に2024年現在の基準に基づく新種記載例や今後重要となる点は、大変参考になりました。白川隆氏(株式会社サカタのタネ)からは、特別講演として「野菜の種子伝染性細菌病の生態と防除」と題し、種子による病原細菌伝搬の危険性と種子検査の重要性、種子消毒法や採取栽培での防除など、ウリ科野菜果実汚斑細菌病での事例を中心に話しいただきました。国内未発生病害の侵入を防ぐための種子病理学の重要性を改めて感じました。中保一浩氏(農研機構植物防疫研究部門)からは、特別講演として「宿主抵抗性を主体としたトマト青枯病の総合防除」と題し、青枯病菌の植物内での動態解析から生まれた高接ぎ木と、それを基幹とした総合防除法について話しいただきました。青枯病に関しては堀田光生氏(農研機構農業環境研究部門)から分類の歴史的背景と近年の遺伝子解析による新たな分類体系の関係について、中原浩貴氏(農研機構植物防疫研究部門)から生物的防除法の研究動向についても話しいただき、青枯病に対して理解を深めることができました。いずれの講演でも会場から多くの質問を頂きました。また、1日目の終了後に会場近隣施設において情報交換会を行い、参加された皆様と和やかに、且つ活発な意見交換ができました。

ご講演いただきました皆様方には、講演要旨の作成を含め大変ご苦労いただきました。この場を借りて御礼申し上げます。また、開催にあたりご準備に奔走いただいた農研機構つくば地区の皆様、当日の会場係を担当していただいた茨城大学古谷綾子先生と学生の皆さんに深く感謝いたします。そして、活発な討論とスムーズな進行に協力いただいた参加者の皆様に深く御礼申し上げます。次回の植物細菌



写真 講演の様子

病談話会はこれまでの開催順で行くと2026年に静岡となる予定です。次回も多数のご参加をお待ちしております。

(井上康宏)

【今後の学会活動の予定】

1. 2025年度日本植物病理学会大会

日時：2025年3月26～28日

場所：サンポートホール高松（高松市）

2. 第5回日韓植物病理学会合同シンポジウム

日時：2025年3月25日

場所：サンポートホール高松（高松市）

3. 談話会・研究会等

(1) 第24回植物病原菌類談話会

日時：2025年3月28日

場所：サンポートホール高松（高松市）

(2) 第34回殺菌剤耐性菌研究会シンポジウム

日時：2025年3月29日

場所：サンポートホール高松（高松市）

(3) 16th PSJ Plant Virus Disease Workshop

日時：2025年3月29～30日

場所：倉敷市立美術館（倉敷市）

【書評】

「最小の病原－ウイルス」佐野輝男 著，2024年12月20日発行，弘前大学出版会，3,150円＋税，350頁

(表紙写真：弘前大学出版会 HP より)



佐野輝男氏は植物病理学者であり、ウイルス研究の世界での第一人者と知られているだけでなく、日本における「ウイルス学」の創始者としても知られている。佐野氏のこれまでの業績は学術界で高く評価されており、日本植物病理学会賞だけでなく日本学士院賞を受賞されている。ウイルスは、ウイルスとは異なる最も小さな病原体で、短い環状の一本鎖RNAのみで構成され、その特異的な性質についての研究が行われてきた。本書「最小の病原－ウイルス」は、自身の研究を基にした300ページを超える研究史であり、多

くの図と写真が掲載され、ウイルス研究に関する半世紀にわたる進展がまとめられている。

本書の「序文－矮化病回想」では、四方英四郎先生（北海道大学名誉教授）によって、Diener博士による世界的なウイルスの発見だけでなく、日本におけるウイルス研究の歴史的経緯、そして関わった研究者が詳細に記載されている。四方先生はウイルス研究の黎明期に佐野氏を弟子にして研究を始めた先生であり、このようなウイルス研究幕開けの歴史が書ける研究者は今では四方先生だけと思われ、その後の研究を現在まで繋いで研究したのが佐野氏である。この継承が、ウイルス学だけでなく生物学の世界の発展にどれほど重要な役割を果たしたことが、想像に難くない。

本書は、5章から構成されている。第1章「ホップ矮化病」では、日本のウイルス研究の幕開けとなったホップ矮化病流行の歴史と病原ウイルスの発見、伝染源植物の探索研究から明らかになった矮化病発生の背後に潜む課題についてまとめ、第2章「ウイルス：自己増殖する感染性RNA」、第3章「ウイルス病の予防、診断、防除」、第4章「ウイルス利用の試み」では、ウイルスの発見から現在に至るウイルス研究の進展を辿っている。最終章の第5章「起源－RNAワールドの生きた化石？」ではウイルスの起源を考察し、「おわりに」ではウイルス学の将来展望を概説している。

「あとがき」で佐野氏は、「より幅広い読者層に研究を通じて知り得た情報を発信することも一つの重要な義務ではないかと思うようになった。……私なりの視点と解釈で、その発見前夜から今日に至るまでのウイルス研究史をまとめようとした……」と書かれている。佐野氏の視点で書かれた本書は、ウイルス研究をしている大学院生や若い研究者にとって参考になる研究史であるばかりでなく、学部生に向けた入門的な教科書とも認識している。ウイルス学の研究者を目指す学生には、きっと学びの指標になるだろうし、これまでウイルスだけでなく植物や動物などに感染する病原体に関わってきた研究者にとっても、これまでにない視点から一つの病原体の世界を覗くことになるであろう。従って、研究者ではなく病原体の世界に興味を持っている方々にとっても、この本は一読の価値がある。40年前に私が過ごした学生時代にはなかった「ウイルス学」を確立し、それを紹介した最初の書となるが、私が大学生に戻ることができたなら、間違いなくワクワクしてこの書を読み耽ったであろう。(大島一里)

【学会ニュース編集委員コーナー】

本会ニュースは、身近な関連情報を気軽に交換することを趣旨として発行されております。会員の各種出版物のご紹介、書評、学会運営に対するご意見、会員の関連学会における受賞、プロジェクト研究の紹介などの情報をお寄せ下さい。下記宛先まで、よろしく願い申し上げます。

投稿宛先：〒114-0015 東京都北区中里 2-28-10

日本植物防疫協会ビル内

学会ニュース編集委員会

FAX：03-5980-0282

または、下記学会ニュース編集委員へ：

門田育生、佐々木信光、染谷信孝、富高保弘

編集後記

明けましておめでとうございます。新しい年を迎え、会員の皆様のご健勝と学会の益々の発展を祈念いたします。

学会ニュース第109号をお届けします。本号では、昨年10月と11月に開催された各部会や研究会等の活動報告を掲載しました。いずれの会場でも活発な議論が交わされており、講演後の情報交換会等で会員同士の交流が深められているのは対面開催の良さだと感じます。

また、昨年12月に出版された佐野輝男氏による著書「最小の病原－ウイロイド」について、大島一里氏に丁寧にご紹介いただきました。研究者だけでなく学生の方々に読んでいただきたいと思います。

3月には香川にて日韓シンポジウムと本大会が開催されますので、会員の皆様には是非ともご参加いただき、学会活動を盛り上げていただきますようお願い申し上げます。

(門田育生)
